

# STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第12回

## アメリカン・インディアンの歴史に触れた曲

新しく人々が土地を開拓する時、先住民との関係はほとんど悲劇的な結果になる。アメリカも然り。誇りにすることはあまりない。白人がヨーロッパからアメリカに移り住み始めてから、先住民にはひどいことをしてきた。彼らの土地どころか、命さえ奪ってしまったといつてもいい。今でもその問題は尾を引いている。今回は、そんなアメリカ先住民・インディアンを歌った曲を紹介しよう。

最初はインディアンの歴史にまつわる曲だ。1971年に全米チャートのナンバーワンに輝いた、ザ・レイダーズの「嘆きのインディアン (Indian Reservation [The Lament Of The Cherokee Reservation Indian])」だ。この曲は68年にドン・ファードンがシングルでリリース、20位のヒットとなっている。レイダーズ版は、そのカバー・ヒットということになる。

インディアンといえば、東南部に住んでいたアメリカ人が代表的な5部族を強制的に移動させたのは有名な話だが、なかでも1838年、アメリカの東海岸に住んでいたチェロキー族の移動は、涙の道 (Trail Of Tears) と表現されたほど悲惨なもの



The Raiders Featuring Mark Lindsay "Indian Reservation" Columbia [US] ●C30768 [1971] ◆Raven [Australia] ©RVCD298

incl. 'Indian Reservation (The Lament Of The Cherokee Reservation Indian)'

だった。徒歩でオクラホマ州のインディアン保留地に移動させられたチェロキー族は1万5千人中、4千人以上がこの最中に亡くなってしまったという。

歌詞はこうだ。彼らはチェロキーの国をそっくりそのまま取り上げて、我々を保留地に放り込んだ。そして我々の生き方も言葉も取り上げ、子供には英語を習わせた。手作りのビーズは、今はもう全部メイド・イン・ジャパンだ。しかし、そんな境遇にありながらも決して誇りを失わない彼らの決意が、続けて歌われる。我々はスーツを着ているが、中身はレッドマンだ。いつか彼らは思い知るだろう、チェロキーの国が再び甦ることを…。

「嘆きのインディアン」を作曲したのは、「タバコ・ロード」で知られている、ジョン・ディー・ラウダーミルクだ。カントリー・デュオ・ルーヴィン・ブラザーズがい

ところでもある。彼がなぜこの曲を書いたかについては、アメリカではよく知られている。それはある真冬の吹雪の日、彼が運転する車がサウス・キャロライナで故障して、チェロキー・インディアンに助けられたとこのこと。彼はそのインディアンに洞窟まで連れていかれ、チェロキーの歴史を歌にしないと自由はないと言われたから、この歌詞を書いたというのだ。しかしその話は実はでっちあげで、面白い話にしようと思っただけだったという。71年にアメリカの著名なDJ・ケイシー・ケイサムがジョン・ディー・ラウダーミルク本人から聞いた話をラジオ番組「アメリカン・トップ40」で紹介したことで有名になったが、それは彼のブラック・ジョークだった。この話は、なんと25年経ってから嘘だと分かったんだ。

●  
アメリカン・インディアンは皆、保留地に住まわせられたという歴史がある。次はそんな保留地に一時入れられていた、アパッチ・インディアン、ジェロニモの話だ。マイケル・マーティン・マーフィーの「ジェロニモズ・キャディラック」は、72年の彼のデビュー・アルバム「タイトル・トラック」で、シングルは全米37位。

マイケルはアパッチ族インディアンのシヤーマン・ジェロニモが車に乗っている写真を見て、この曲を書いたそう。彼にとって、ジェロニモを高級車に座らせて文明化させようとした写真を撮ることが皮肉にしか思えなかった。アルバムの裏ジャケットに、その写真から描いた絵が載っている。(シングル盤のジャケットにも使われた。ジェロニモは何年もアメリカの軍隊から逃げ回っていたが、のちに降参し、軍隊の刑務所に入った。

この曲の歌詞にはこんなフレーズがある。'Sergeant, sergeant, don't you feel, something wrong with your automobile.' ねえ、ねえ軍曹、あなたの車は何かがおかしいんですか? 'Governor, governor, now ain't it strange, they didn't have no cars on the Indian range.' 知事さん、知事さん、不思議ですよね。インディアン



Michael Murphey "Geronimo's Cadillac" A&M [US] ●SP4358 [1972] ◆Raven [Australia] ©RVCD191

incl. 'Geronimo's Cadillac'

の土地の中には車なんかありませんよ。そっぴ、'Warden, warden, listen to me, be brave and set Geronimo free.' 看守さん、看守さん、勇気を振り絞って、ジェロニモを自由にしてあげなさい。そして'Ripped off the feathers from his uniform.' ジェロニモの着衣についての羽も全部むしってしまった、と続くが、これはジェロニモのプライドもむしっているという意味がある。

最後に、'Jesus tells me and I believe it's true, the red man are in the sunset too.' キリストから聞いたけど、僕は真実だと思っ、レッドマン (インディアン) も同じ夕日の中にいるんだ、と歌われるが、これは、レッドマンも白人と同じ人間だから差別してはならないという、ゴスペルに影響されていたマイケルの意見だ。'They took all their land and they won't give it back, sent Geronimo a Cadillac.' 奴らは彼らの土地を全部取り上げた代償として、ジェロニモにキャディラックを贈った。ちなみに、ジェロニモが乗せられた車はキャディラックではなくロコモビル社製。蒸気で走る車だ。マーフィーは、きっとキャディラックの方が贅沢なイメージがあ

るから、曲のタイトルに使ったのだらう。

● 次は1910フルーツガム・カンパニーの「インディアン・ギヴァー」だ。69年に全米チャートの5位まで上がった。インディアン・ギヴァーとは、アメリカで使われる言い回しで、一度あげたものを取り戻すような人のことをいう。これは、白人がインディアンに行なってきた手口を表現したものだ。しかし、インディアンにとって、これは非常に微妙な言葉だ。なぜなら、もともとインディアンたちにはお金のコンセプトがなく、何かをもらったら、お返しをするという習慣があった。もし、もらったものが必要なかったら、彼らはくれた人に返してしまうこともある。それはインディアンにとっては普通のことなのだが、アメリカ人にとっては、あまり喜ばしくない習慣だ。おかしなことに、インディアンに



1910 Fruitgum Co.  
"Indian Giver"  
Buddah [US] ●BDS5036  
[1969]  
.....  
incl. 'Indian Giver'

土地を渡しておいて、のちにそれを奪ったのはアメリカ人だ。それなのにアメリカン・ギヴァーと言わず、インディアン・ギヴァーという言葉があるのは皮肉なことだ。この曲では、恋人にふられた男が、君は僕のことを永遠に愛してくれると約束してくれたのに、僕にくれた愛を取り戻すなんてあんまりだと訴える。そして、彼のものを去っていく彼女のことを、インディアン・ギヴァーと非難する。

● 次は悲劇的なアメリカン・インディアンヒーロー・アイラ・ヘイズを歌った「バラッド・オブ・アイラ・ヘイズ」だ。アイラは06年のクリント・イーストウッドの映画『父親たちの星条旗』に出てくる男だ。あの有名な写真の硫黄島で、アメリカの国旗を立てた5人のうちの一人だった。ヒーローになったが、彼はその立場をどうすることもできなかった。インディアン保留地に戻ると何もなく、のちに、酔っぱらってドブの中で死んでしまった。

この曲はアメリカのフォーク・シンガー・ピーター・ラファージの作品で、様々なアーティストがカバーしている。ボブ・ディランが、コロンビアからアサイラム



Bob Dylan  
"Dylan"  
Columbia [US] ●PC32747  
[1973] ●ソニー ●SICP30488  
.....  
incl. 'The Ballad Of Ira Hayes'

にわずかの間だけが移籍したとき、コロムビアが勝手に出した『ディラン』（73年）にも入っている。収録された9曲は、70年にリリースされた『セルフ・ポートレート』『新しい夜明け』からのアウトテイクだった。9曲すべてがカヴァー曲で、ボブにとっては出したくないアルバムだったが、全米チャートでは17位まで上ってしまった。曲はこう始まる。みんな集まってくれ。

伝えておきたい話がある。忘れてはならない勇敢なインディアンの話だ。アリゾナのフェニックスの谷間を耕していた、ピーマという、勇敢で平和主義の部族の一人だ。何千年の間、そこには湧き水が流れていたが、白人が現われて、水の権利を奪ってしまった。農作物を作れなくなったアイラの家族は飢え、畑から雑草が採れるだけだった。しかし、戦争が始まると彼は軍隊に志願で入隊し、白人の強欲を忘れた…。

● ここからコーラスが入ってくる。彼を酔っぱらいのアイラ・ヘイズと呼んでみな。彼はもう返事をしない。ウイスキーを飲むインディアンも、戦争に行った海兵隊も、もう返事をしない…。

● 次のヴァースは彼が戦争に行ったときの話だ。硫黄島を攻撃した時、250人が山を登ったが、帰ってきたのはたった27人だった。またコーラスがあり、アイラがインディアンだったことで、アメリカのいいPRになるとアメリカ中に連れていかれ、ヒーロー扱いされた。しかし、彼はそのプレッシャーに対応できなかつた。地元に戻るためのピーマ・インディアンで、お金も農作物もない、チャンスもない。アイラの地元の人々にとっては、硫黄島での彼の功績などまったく関係ない。そしてアイラは飲んだくれになり、監獄のお世話になることもしばしばだった。そしてある朝、酔っ払って死んでいる姿が見つかった。ひっそりしたドブの中の2インチの水がアイラ・ヘイズの墓場だった。ピーター・ラファージはインディアンを引いていて、デイルン本人とも親交があった人物だ。

● 締めくくりは、ボブ・マーリー&ザ・ウ

● エイラーズの「バッファロー・ソルジャー」。アメリカ・インディアンと戦った黒人軍隊の話で、題材にした曲だ。アメリカの歴史の中でも、特に考えさせられることが多いテーマだと思ふ。

● 1866年に作られた、アメリカの黒人軍隊をご存知だろうか。南北戦争の時代、アメリカの北部には黒人だけの連隊があった。彼らの役目は、西部に向かっている入植者をインディアンからの攻撃から守ること、インフラを作ること、そして西部に居住するインディアンと戦うことだった。バッファロー・ソルジャーという名称の由来は、黒人のカーリー・ヘアがバッファローの毛皮に似ていたからつけられたという説と、彼らが追いつめるインディアンをバッファローが戦いには強かったからという説があるようだ。いずれにしても、バッファロー・ソルジャーは否定的な使われ方をす



Bob Marley & The Wailers  
"Confrontation"  
Tuff Gong/Island [UK]  
●ILPS9760 [1983] ●アイランド(ユニバーサル) ●UICY15031  
.....  
incl. 'Buffalo Soldier'

る言い回しではない。強いプライドを持つて、あるいは敬意を込めて使われる表現だ。ボブ・マーリーは、このバッファロー・ソルジャーの物語にとっても興味を持ったぞうだ。皮肉にも黒人たちはアフリカから奴隷としてアメリカに連れてこられて、同じく弱い立場のインディアンと戦うことになってしまったわけだ。この曲の歌詞は非常にシンプルなので、戦わされる両者の悲哀が具体的に語られているわけではないが、マーリーの巧みな歌による表現の効果もあり、心に訴えかけてくるものは大きい。彼はまた、バッファロー・ソルジャーの存在をラストファリアンにもだぶらせて描き出している。

● この曲は、ボブ・マーリーの死後、83年にリリースされた未発表音源集『コンフロントエーション』に収められた。シングルでも発売されている。アメリカにはインディアンを歌った曲がまだまだある。今を生きる俺たちにも、考えさせられる曲が多い。音楽として表現されることで、広く、誰にでも身近に歴史を感じることができる。このことにも意味があるのだと思ふ。